

# 神奈川県現代俳句協会会報

第167号

令和7年3月発行

令和六年度神奈川県現代俳句協会俳句大会

講演録 「マイノリティとしてのことば」

松下カロ 講師

(令和六年十一月二十三日 於：かながわ県民センター)



(松下カロ講師)

みなさまこんにちは、カロでございます。

本日の演題を「マイノリティとしてのことば」とさせていただきました。きましたのは、私自身がマイノリティであるという自覚があるからです。大学で美術史を勉強しましたときも、短歌や批評、俳句をやったまいりました。でも、ずっと自分は少数者である、皆さんの考えていることとはちよつと自分は違うんじゃないかという思いがありました。ただ、多数から外れているという気持ち、人と違うのではないか、独りぼつちだとかいう気持ちは、誰でも心の中に持っているのではないかと思ひます。そしてそういうところがその人の個性とか、言葉を作っていくのではないかと思ひます。

I 誰もが自分の中にマイノリティを持っています

金子兜太さんもマイノリティとして登場された方だつたと思ひます。俳句は五七五、季語を使う、

有季定型、それが大きな流れですけれども、金子さんはそれに疑問を呈された。そして社会とか政治を俳句に呼び込むという仕事をなさつたと思ひます。金子さんは大変評価されたその後でも、例えば種田山頭火とか小林一茶とか、一生マイナーな表現者であつた方に心を寄せておられたのではないかと思ひます。そこが金子さんの魅力であつて、金子さんは最後まで自分はマイノリティだという気持ちを大事に持つておられたのではないのでしょうか。

◆平井照敏さんにとっての「片隅」

桃の実を海岸におき去りにけり  
麦藁の帽子のなかにをにおもふ  
才なしとしほから蜻蛉打ちにけり  
爪切つて畳におつる野分かな  
はなびらや乳歯一本てのひらに

私がいろいろ教えていただく機会がありました。平井照敏さんはいつても、「僕は隅っこで本を読んでいるのが好きなんですよ」とおっしゃいました。平井さんは、イヴ・ボヌフォアというフランスの詩人の研究や、批評とか、たくさんのお話をなさつていたんですけれども、常に自分はその中で「隅っこ」にいた、それが自分の源泉だつた、とおっしゃっていました。当時私は大学生で、平井さんは加藤楸邨さんの「寒雷」の編集長でした。それが、「自分は、言葉としてはスランプだ」とおっしゃつて、困つてらつしやるんです。自分の片隅を探して、そこから言葉を作つていきたいとおっしゃつていました。そして自分の常に味方になつてくれるのは読書だと、よくお話をされました。平井さんはいつも「あなた何の本を読んでいますか」とお話をされました。

トピックス

俳句大会講演録  
諸家近詠  
会員新刊案内  
サミット短信  
湘南サンシャイン句会報告  
春の一句



か」とお訊きになりました。三冊ご紹介しますが、鈴木三重吉さんの『桑の実』は、私が平井さんに初めて「今この本を読んで好きです」と申し上げた本です。ミシェル・フーコーの『言葉と物』は、私が平井さんに教えていただいた本です。『桑の実』は、桑の実をめぐり寂しく終わる恋愛が描かれています。当時は昭和の終わり頃、大江健三郎さんなど、大変インパクトの強いものが多く、私もショックを受けて読んでいました。ところがこのお話は、まことに読む人をいやしてくる、本当に気持ちよく読める本です。『言葉と物』はフランスの哲学者ミシェル・フーコーの、二十世紀の哲学をかき乱したというような本です。「人間は進化してきたのではなくて時代に流されていただけだ」とか、「ある時代は次の時代に必ず否定される」とか。頭がちぎれそうな本です。ただこの二つを平井さんと共有させていただいたことが、私にとっては幸せで、皆さんにこのことをお話できてよかつたと思ひます。三番目は『氷壁』、井上靖さんの有名な小説です。これは戦後日本で、厳しい雪山に登る人たちの話で、私はこの本を読んだ時に十二歳でした。最初に読んだ大人の本で大変引き込まれました。この本には悪い人は出てきません。みんなが自省的で、ひたむきに生きようとしていて、それがとても感動的でした。そのヒューマンなお話を作っているのは自然なんです。厳しい山、雄大な山がお話を浄化してくれている。その中である登山家の詩が引用されているんですけれども、それがとても素晴らしくて忘れられないものになっています。ロジェ・ルプラという登山家の詩で、これを書いたあとにこの登山家は遭難して亡くなつて

しまっています。

モシカアル日

モシカアル日、私ガ山デ死ンダラ、  
古イ山友達ノオ前ニダ、  
コノ書置ヲ残スノハ。

オフクロニ会イニ行ツテクレ。

ソシテ言ツテクレ、オレハシアワセニ死ンダト。

オレハオ母サンノソバニイタカラ、チットモ苦シ  
ミハシナカッタト。

親父ニ言ツテクレ、オレハ男ダツタト。

弟ニ言ツテクレ、サアオ前ニバトンヲ渡スゾト。

女房ニ言ツテクレ、オレガイナクテモ生キルヨウ  
ニト。オ前ガイナクテモ、オレガ生キタヨウニト。

お母さん、お父さん、弟、妻と、短い言葉で、

人間関係が非常に本質的に表れていますね。人の命を要求してくるような厳しい山、山登りの言葉だからそれができる。「山で死んだら」と一言でしか書かなくとも、山を背景にすることで、人間と人間が非常に強く結びれているような言葉が最後には出来上がっていると思いました。「氷壁」の登場人物の一人がこういうことを言います。

「山に入っている時男が思う女は、特別な存在だ。その時女性への男の思いは純粹だ」。こんな風に思われてみたいですけども、山は女性であって運命であって生であって死である。私たちは俳句という形で、山であったり海であったり桜であったり向日葵であったり、いろんな季節の言葉に自分たちの心象とか述懐を託すわけですけれども、デュブラも同じことをやっていると思います。俳句というのは狭くない、いろいろなところにつながっていく力のある媒体だと思えます。

## II マイノリティな俳人

次は、私がマイナーな俳人として、皆さんにお話ししたい俳人です。

### ◆中川智正（1962〜2018）

中川智正さんは、オウム真理教が引き起こした

一連の殺人事件の実行犯の一人で、もともとお医者さんだった方です。小さな子供を含む数十人の殺人に手を染め、2018年7月に広島刑務所で死刑が執行されています。「中川さん」とお呼びいたしますのは、死刑を受けられたということでは法的な罪は償われたのではないかと思うからですが、オウム真理教はたくさん被害者の方であって、遺族の方もおられて、ここで皆さんにお話しするのがいいことかどうか。それだけにそういう迷う人のお話を皆さんに聞きたいという気持ちで中川さんのことを取り上げさせていただきます。

立春や卵も立つと習いけり

重力に魅かれて石は月となり

この二つは、中川さんがお医者さんだったということが、いかにもわかる、無垢な感じがする句です。全部死刑が確定した後の句ですけども、中川さんの大変不幸な人生と、この二句が、私の中では出会わない。その格差に黙ってしまうほかないという感じです。

「谷崎の源氏うつくし」と笑む検事

これには少し長い詞書が付いています。

「ある検事になにかいい本はありませんかと訊いたことがある。そういうことを質問したくなる人だった。相手は谷崎潤一郎の『源氏物語』を読んだとき、こんなに美しい日本語があるのかと思っただねえと、少しくつとりした表情を見せた。その物語をいま読んでいます」

検事というのは逮捕された被疑者の、処罰を定めるのが仕事ですよね。とても緊張した関係であるうはすが、二人を結び付けているのが、本、日本の古い書物です。私が平井さんにいつも訊いていたように、「何かいい本ありませんか」と、死刑囚の中川さんが検事さんに訊いたというのを知って、自分が訊いているみたいなきもちになりました。そしてそれを結んでくれるのはやっぱり本な

んですね。

みそ汁に對流のあり花の冷え

柔らかく母老いにけり花すすき

わが骨をわけるわけかた春の泥

消えて光る素粒子のごとくあればよし

このあたりは死刑の覚悟というか、どこかで冷静になろうとしているところもあります。そして平井さんの研究されていたイブ・ボヌファの詩に戻ってみます。

光はひとりの子ども 戯れ 何も望まず 歩

き 歌っている（「梢の国より」）

「光はひとりの子ども」というところが、「消えて光る素粒子」のところとなんとなく似ている感じもして。いま私たちは存在していますけれど、いずれ存在しなくなる、その時光になって消えるのか、あるいはどこかにいってまた会うことができるのか。光というのが大変いい象徴になっていると思います。

真白から鳥なき獄へ白鳥来

中川さんを支援する俳人の方がおられまして、私の白鳥の句ばかり入っている句集をお送りしましたら、中川さんがその返礼に作ってくださいました。中川さんの句を読んでいますと、中川さんの不幸な人生、中川さんの罪と結びつかないんですね。それを自分の中でどう処理すればいいかわからない。中川さんのお話をするときにも申し上げたいんですけども、だいたいの男の方の句には個が出てくるんです。女の人の句には若干それが薄いんですね。こういうマイナーな二人の俳人にもそういうところが現れている感じがして、そのことはまた中川さんのお話したいと思います。

### ◆中村苑子（1913〜2001）

喪をかかげいま生み落とす竜のおとし子  
怖れつつ葉裏にこもり透きとほる

河の終りへ愛を餌食の鴉らと

登音や水底は鐘鳴りひびき

撃たれても愛のかたちに翅ひらく

鴉いま岬を翔ちて陽の裏へ

中村苑子さんは、1960年から70年代に前衛俳句、主観的に句を詠むという流れの運動の中心にいた方で、高柳重信さんのパートナーです。ここに挙げました六句は、中村苑子さんの代表作「水妖詞館」の冒頭の六句です。私は中村さんに大変昔から執着してきました、でもこの六句は、皆さんなんのこともよくわからないという人も多いと思うんですね。実は私もよくわからないんです。「水妖詞館」の最初の句です。

喪をかかげいま生み落とす童のおとし子

なんのこともかさっぱりわからない句ですよ。

「喪をかかげ」というのは、「喪に服す」。「産み落とす」というのは「生まれる」ということで、「生誕」と「死」が小さな句に詰めこまれている。そして唐突に「童のおとし子」が出てきます。

「喪をかかげ」は、人間がやることですよ。産み落とすは、生んでいるのはタツノオトシゴが生んでるのかもしれない。もしかしたら中村苑子さんが、句を詠んでいる主体がタツノオトシゴを産み落とすのかもしれないし、あるいはタツノオトシゴが喪をかかげるのかもしれない。さつき申し上げたように、女性の句、特に中村苑子さんの句には、主語が混濁するところがあります。誰が詠んだのかわからない。もちろんそれをたくらんでやってるんですね。タツノオトシゴというのは、とても変わった生まれ方をします。メスがオスのおなかの袋に卵を生んで、その卵をオスがおなかで育てて、生まれるときは、オスのおなかから小さなタツノオトシゴがぱーっとたくさん生まれるんですね。ですからタツノオトシゴはお父さんが生んでるのかお母さんが生んでるのか、つまり男性が生んでいるのか女性が生んでいるのか、ある

いは主体は中村苑子さんなのかタツノオトシゴなのか、まったくわからない。わからなくしているわけです。このように主語を希薄化して何が起るかというところ、少なくともこの句の場合は、これを詠んでいるのは全女性だということになります。私がこの句を読んでいると、いつかこれは自分が詠んだ句じゃないかと思ったりしてしまったりもある。そういう魅力のある人です。先ほどの中川さんの句は、その人の人生からどうしても句を離すことができないんですけれども、中村苑子さんの場合は自分の人生も、主語としての自分もすべて捨てているんです。それでむしろ大きな全体としての主語を得ているところがある。今日お話しするのにお二人のどちらかに決まらなくて、なんとか二人詰め込もうと思ったときに、こういう対比が自分のなかで生まれて、それは私というマイノリティのなかで、私が自分で考えたことです。そのことが自分にとっては大切で、これまでも「同人誌に入りませんか」と言われたりして本当に心が動いたこともあるんですけれども、やっぱり一人でやってきているからこそ、こういう気持ちになれると、大変それを大切に思っています。俳句は同人誌が支えていらっしやるので大変それは素晴らしいことだと思っただけでも、たまにはこういうマイノリティがいて、皆さんに今日こういうことをお話しできたのも、ありがたいことだと思えます。

### III これからのことばとマイノリティ

こちらの写真をご覧ください。(写真回覧) 女の人が二人、深刻な顔をしている写真です。これは「偽の記憶」という題名で、2023年にある写真のコンテストで部門の賞を取った作品です。この写真は写真家が被写体を写したのではなくて、AI(人工知能)が「偽の記憶」という題名を示唆されて、作り出したものです。私には、女の人たちは、戦争とか貧困とか、格差とか、そうしたものの被害者、要するにマイノリティのよう

に見えるんですね。大変内面的で、評価できると思うんですけども、人間ではなくて人工知能が作ったものとしたら、その価値はなくなってしまうのでしょうか？初期のコンピュータは記憶とか計算に長けていて、人間の役に立ってくれたりしたんですけども、今は人間の脳の中と同じような構造をコンピュータに植え込み、人間と同じようなことができるようになってくる。私たちが思っている以上にそれは進んでいて、例えば論文とか小説とか、作曲とか、そういうものも書けるようになっていきます。

#### ◆ AIの句作

ここで話を俳句に戻しますと、「AI一茶くん」が、ソーシャルサイトの「X」に発表した句です。

満開の桜の中に寝てしまふ

山百合の句ひのなかの霊柩車

太陽を突き放したる牡丹かな

もの置かぬ机の上や夜の秋

耳遠き人となりゆく十三夜

十二月八日過ぎたる海の色

これらの俳句は全部人工知能が作ったものです。これを読んで皆さんはどう思われるでしょうか。私は、一茶くんなかなかいいと思うんですね。「満開の桜の中に寝てしまふ」、これを読むと「さまままのことと思ひ出す桜かな」を思い出します。私はそんなに一茶くんと芭蕉のマインドは違わないと思うんですね。満開の桜があんまりきれいなので、一茶くんは寝ちゃう。芭蕉はもともと昔の思い出に思いをいたす。両方とも、今ここからどこか別のところに連れて行かれるということから言えば同じなんです。四句目の「もの置かぬ机の上や夜の秋」、これは正岡子規だと言われると、ああそうかと思うような気もして、自分の鑑賞がいかにかいい加減なものかというのを突き付けられる気がします。

レジュメの最初に「これからのことば」と書いて

## 諸家近詠(到着順)

二〇二四年秋 龐 潤(夢)

秋深し髭剃る度に年を取る  
秋だつて誰か居る浜トンビ舞う  
読書の秋空気読むのがやつとです  
天高し犬の糞まで十センチ

春の駅 北村 量子(ロマネコンテイ)

訛にもとりどりの色春の駅  
雲の峰この淋しさの処方箋  
人生のきれいな着地敬老日  
成人の日飛距離は無限風になる

加賀の秋 青木 敏行(森の座)

ずわい蟹の贅沢井を食ふ至福  
黄落や八十路の孤影引きずりて  
コスモスの薄き濃き紅加賀日和  
湯の街の大火を記す小さき鐘

福助 鹿又 英一(蜜の会)

長生きがお尻ふりふり春日傘  
葉莖が畳に落ちてゐる薄暑  
筑波嶺の女体男体霧深し  
福助の足袋履いてゐる下足番

春着 川島由美子(齒車)

空中をのびのび榎植みな歪  
句会果てひとりに戻る小夜時雨  
長電話足の指から湯冷めする  
春着着て私の中の母と祖母

子供靴 荒 理依子(無所属)

着ぶくれてますます世事に疎くなり

荒巻の気迫に満つる面構へ  
背負ふ物煙に托しどんど焼き  
凍星やアウシユビッツに子供靴

丹沢山 北村 文江(藍)

ボルダリングは地球の乳鉄鳥渡る  
丹沢山とんぼ帰りや虎落笛  
泡立草ズカズカ大地侵略す  
山の鍵ギイと開ければ新緑が

小田原 飯田美枝子(無所属)

雪の日に風呂炊き明日を待つ日暮れ  
山麓にはばのりを売る店のあり  
里いもと烏賊の煮付けや妣の里  
初東風や古き小田原古き友

をかしきこと 木下ようこ(海原)

こほろぎの髭検索の履歴かな  
その晩の空気を読みり牡蠣フライ  
困つたひとだ無花果の重さかな  
蠟梅の香やぎざぎざの父に触る

春隣 菊地 春美(無所属)

子と共に静かな夕餉春隣  
推し活の娘にエール打つ二月尻  
引鴨へ「二拠点暮らし終ります」  
水温む苑のベンチに憩う午後

## 新会員紹介欄

古曆 足立 和子(ロマネコンテイ)

玲瓏と風百年のぶな紅葉  
悔一つ消し去る風や古曆

冬ぬくし鯉と向き合ふ禅問答

ておりますが、「俳句が前進してゆけるかどうかは俳句以外の内容をいかに取り込んでゆけるかどうかで決まる」、これは三橋敏雄さんが1970年に書かれた文章です。俳句以外の内容というのは、あるいは俳句、俳人以外の俳人のことかもしれない。それを認めていけるかどうかこれがこれからの言葉、これからの俳句に非常に大きな意味を持っているのではないかと思います。なかには俳句の自動製作サイト、AIが作った俳句をご自分の俳句だと発表されている方が、場合によってはいらつしやるかもしれない。これは危険なことだと思われまますか、あるいはそうではないでしょうか。先ほどの写真でもそうですが、著作権とか、権利が、あまりにも人工知能がはやく発達してしまつたので、どの国でも法律がそれに付いていかないという感じですよ。日本でもまったく決着がついていないところですよ。皆さんはどう思われますか？

これから俳句がどうなるか、私は、コンピュータに相談したつていいと思うんですね。人工知能が描いたものも、私たち人間が描いたものと同じように評価していく。コンピュータが描いたものを自分のものだと言つたつていいと思うんですね。まったく私は悪いことだとは思つていない。ただ私は自分で自分が作りたい時に作つていきたい。最後までマイノリティでいたい、私カロの気持ちでございます。

本日は脈絡のないことばかりお話ししましたけれども、ご清聴ありがとうございました。

松下カロ先生プロフィール

一九五四年九月生まれ、東京都出身。早稲田大学文学部卒業(ロシア美術専攻)。「象を見にくく言語としての津沢マサ子論」にて第三十二回現代俳句評論賞。著書に『女神たち 神馬たち 少女たち』(二〇一六年、深夜叢書社)、句集に『白鳥句集』(深夜叢書社)

テープ起こし・まとめ 山戸 則江

## 会員新刊案内

『春のことぶれ』 酒井弘司著

(二〇二四年八月、高遠書房)

中岡 昌太 記

日向ぼこしながらホットコーヒーを飲むそんな時間に、また切り株に腰をかけ、鳥のさえずりを聴きながら、また川岸に水の私語を聴きながら読むのにふさわしい一書がこの『春のことぶれ』と言うエッセイである。

本書は俳誌「朱夏」主宰酒井弘司氏が自分自身の主宰誌「朱夏」に断続的に掲載したものと「俳句あるふあ」に掲載された数編を一つにまとめたものである。そんな事を「あとがき」から引用してみよう。

「随筆集『春のことぶれ』は、俳句誌「朱夏」に「蝸谷山房雑記」として断続的に書きついできたものと、俳句総合誌「俳句αあるふあ」に連載してきた数編を一本にまとめたものです。

「蝸谷山房」の呼称は、七月から九月にかけて蝸のよく鳴く谷戸に住む、わたしの茅屋の別称です。

北丹沢の山並を眺めながら、澄んだ空気を存分に吸っての生活です。そこを起点にして

1 谷戸の四季

2 俳人・詩人理想

3 旅の楽しみ―佇みながら

と、日々の生活や、人生の渦中で出会った先輩俳人・詩人についてのこと。また、谷戸の茅屋から旅に出た思い出など、大きく三つに分けて掲載しました。(以上、引用)

特に我々俳人の興味をそそるのは、著者が若くして「海程」創刊同人であったことから、師の金子兜太氏のことや、寺山修司、飯田龍太、高柳重信、森澄雄さん等々、また詩人の谷川俊太郎、田村隆一さんなどと交流があったことである。また旅の話なども興味が尽きない。是非一読をお勧めしたい一書である。

塚田佳都子句集『はなかつみ』

(東京四季出版令和六年十月十七日発行)

麻生 明 記

『はなかつみ』は塚田さんの第三句集。第一句集は『耳目』。第二句集『素心』から八年をおいての上梓である。

『はなかつみ』は上質の抒情に満ちた味わい深い句集。結社「風鈴」および「好日」の同人、さらに「草樹」への参加を通じて培われた塚田さんの確かな力量が感じられる。作風は声高に主観を語るのではなく、静かに自らの内なるものに目を向ける姿勢が貫かれている。作品の多くは実際の体験に基づく詩的な感動や発見が言語化されたもので、固有名詞を含む豊富な語彙と知性的な措辞が鋭い。先の『素心』の作品の多くに感じられた柔らかな包み込むような情感が、今回の『はなかつみ』では、どちらかと言えば硬質の乾いた抒情に微妙に変化して現れる。結果として孤高のイメージさえ漂ういい意味の開き直りが感じられて楽しい。例えば、

お互ひの背後の桜見てをりぬ

ちつと待つ青鷺があるわたしがあ

行く春の人はせつせと手を洗ひ

ほどほどの皺となりけり千大根

十五夜を愛でどちらかが先に逝く

冷え切つた身よりあたたかい泪

芒原先頭の人から消える

ペンを持つ芒の軽さになる日まで

など、存在の根源に迫ろうとする作品に独自の境目が窺われる。淡々とした直截な措辞ゆえに、かえって深いところまで鑑賞が広がり、読者は自身の思いを重ねることができる。感銘句をもう一つ。

平凡な日々のつづきの桃傷む

柀酔人句集『ひいらぎの花』

(令和六年十一月発行)

衣川 次郎 記

句集名は「丸に抱き柀」の家紋から名付けたと言う。「横浜なでしこ」句会(矢澤末子)、「花顔」(武井梅仙)を経て「石楠花俳句会」主宰、病気で終刊。

賀状来る自筆の一字あればこそ

初窯や土を泣かせて火が喋る

いごっそう明治の祖父の門の松

すかんぼを噛めば郷里近くなる

目刺焼く乾ききれない海の色

呼び覚ませ五感の力木の根明く

いごっそうは、郷里土佐の方言。龍馬のごとく

信念を貫き通す一徹者をさす。一級建築士の仕事

と並行して、生き甲斐として俳句を根底に据えて

きた作者の心根と言えようか。

〈すかんぼ〉の句は、当然その土佐で育った作者の感慨である。〈呼び覚ませ〉には、土佐人としての心意気というものを感させせる。

だぼ沙魚や人は悲しい嘘をつく

生き甲斐を見つけ余生の蝸牛

発酔の音が囁く新走り

過疎の村案山子と話す老婆をり

神無月徳利の口もものを言う

団栗や三途の川の渡し銭

〈だぼ沙魚〉の句は、誠実に生きてきた証である。俳句に生き甲斐をみつけ、蝸牛に自身を重ねる。〈発酔〉と〈神無月〉には、酒豪の多い土佐人ならではの句である。〈団栗〉の句には、思わず微笑んでしまう。重い内容を、軽くかわしてしまふ機微を感じとるのだ。厳しい人生を生き抜いて来たにもかかわらず、こう詠めるのだ。

誠実さと重厚さをかねそなえ、その根底には他

者に対する優しさが満ち溢れている。

是非一読をすすめたい句集である。

サミット短信

辻堂句会

伊藤 梢 報

於・藤沢市市民活動推進センター

第三一四回

令和6年11月30日

山茶花の咲くを合図に人と逢ふ 安藤 靖  
 久々の映画の余韻日記買ふ 生田 暁美  
 莞爾としてけやき大樹や冬夕焼 石鎚 優  
 キーキーと冬が来るぞと里の鳥 岩田 信  
 プルトップ引くのも難儀虎落笛 大本 尚  
 深耕の畑真黒に冬眠す 奥村 純子  
 青空を吸い込む如く布団干す 櫻村 弘子  
 十二月日本列島貧血気味 金栗トモ子  
 枯葉かな都会の隅の青き傷 佐々木重満  
 冬木に芽バスの走らぬ日にも慣れ 田畑ヒロ子  
 真実を包む青空吊るし柿 長島喜代子  
 一ミリの段差も高し冬の朝 中村まさえ  
 湯豆腐やいっしか本音向かひあふ 野口美穂子  
 正論を説く君寂し鱈雲 平山 圭子  
 大山の豆腐頂く冬紅葉 廣田 洋一  
 寒風に立つや松葉の青々と 星 由江  
 落葉樹冬日時間の螺旋形 吉田 典子  
 入れ墨めく飢えの記憶や臘八会 若林つる子  
 断捨離は心の隅にむかご飯 渡辺 正剛  
 雪の富士満票という決まり方 伊藤 梢

第三一五回

令和7年1月25日

飛びそうな鉛筆がある春隣 吉田 典子  
 後悔と挫折と葱をみじん切り 藤方さくら  
 大寒のすぐ伸びる爪切っている 伊藤 梢  
 香にみちて蠟梅の道暮れにけり 生田 暁美  
 世の憂をとかず輝き石路の花 占部美土子  
 寒の猫日向ばかりを追う明日 岩田 信  
 火の元になりさうテレビの火事映す 安藤 靖

寒鯉に不動の気概ありにけり  
もういいよもういいかいと椿落つ

大本 尚

死に下手と誹ればそしれ冬の蝶

櫻村 弘子

七種やいずれも確と土を抱く

金栗トモ子

寒の水素顔きりりと映したり

佐々木重満

梅一輪歩む力を貰いけり

土岐 詳恵

春泥の何処曲りても行き止まり

平山 圭子

霜柱踏めずにいます木偶の坊

星 由江

月冴ゆる二人の歩む影明かし

長島喜代子

待春や何か良きことありそふな

中村まさえ

竹藪まで届く日差しや梅早し

野口美穂子

日脚伸ぶ背丈と家計縮みおり

廣田 洋一

左義長の空を焦がしぬ相聞歌

長谷川昭放

笑ヶ幸ヶト 身ヲ裂ク 窓ノサイネリア

柳 蒼柳

寒中の水のかたさを言いつのる

りよう

どんど火や棄てたき過去は数多ある

若林つる子

収穫の大根づくし夕の膳

渡辺 正剛

◎連絡先：事務局佐藤久まで

奥村 純子

第四一九回

令和7年1月5日

みなとみらい句会

菅原 若水 報

第四一八回

令和6年12月8日

熊の生存権民主主義を問う

福耳や外面のよき寒鴉

冬落暉貝殻坂を上りつめ

江ノ電に揺れる古民家冬あたたか

失いしもの冬天に書きつける

鳴り止まぬライン通知や去年今年

子等の声冬田巨大なスタジアム

柿ピーのピーナツを運る去年今年

水仙を抱きてジョン・レノンの忌

初御空新といふ字を指で書く

人民の声なき声よ虎落笛

初風の海へ朝日が溶けている

勇ましく民意整う十二月八日

戦争が隣に座る寒卵

あくまでも素朴がいね冬の月

春着の子握り拳にある未来

お気持ちをお願いをく十二月

昭和百年金箔入りの年酒かな

真赤に滾るボルシチや民互つる

初しぐれ一小節のピチカート

数え日や年に一度の擬似家族

炬ばなしに加わるかたちなきひとよ

新年やひとつ撞いたり寺の鐘

十二月八日親父ばつさり髪を切る

待春やもう出て来ない鳩時計

水仙の気まぐれな向き倦怠期

臘月あの子を泣かせたのは僕

冬林檎背びれ尾びれのないうわたし

背開きの光琳屏風どんとおく

冬ざれや民主主義にも独裁者

スクワットの脚は健在菜花摘む

軍手とは戦の名残り雪卸し

身に棲める鬼も老いしか豆を撒く

背進の民は春窮パレスチナ

加害する気はなく加害亀鳴けり

◎連絡先 菅原若水 s-shinya@sb.dion.ne.jp

までご一報ください。折り返し「句会へのお誘い」をお送りいたします。

星川句会

12月

金栗トモ子 報

令和6年12月2日

小春日やのぞきたくなる埴輪の目

世阿弥来よ屠殺の星の石路の花

石鎚 優

麻生 明

石鎚 優

行く秋に何時もの店で送別会

鏡と冬日時にけんかをするとときも

ワンちゃん語分かるばあちゃん日向ぼこ

帰らうか狩猟採取の生活に

凧や逃げの算段間に合わず

湯豆腐を本音で擲う平和の夜

ポケットに残りし外貨除夜の鐘

一茶忌やいじけた心詩に昇華

1月

身体髪膚唯我独尊初湯殿

また今日も席ゆずられて門松立つ

初詣仁王の息をかい潜り

謙譲とふ言葉あり寒葶

弔いの手から離るる冬薔薇

一對の銀杏落葉のオス探す

大根洗う無罪の証現わるる

2月

声となる自問自答や牡蠣を割る

山脈といふ母胎あり一月尽

春浅し巳年の空気湿っぽい

湯上りの足裏の荒れ卵酒

大寒の空ゲルニカのモノトーン

春立つやげんき呑気で根気良く

バス停に学帽並ぶ春きたる

細々と生きて葛湯を吹く日和

ものの芽や小さき鉛筆で書くスコア

遠山の大的字けぶる春の雪

雪深深下で息づく土は黙

◎毎月第一月曜日 星川駅下車「かるかも」また

は「アワーズ」で開催。

◎連絡先：事務局佐藤久まで

丹沢句会

竹村 半掃 報

順不同・秦野市西公民館

大塚 真紀

桐山 芽ぐ

栗原嘉一郎

菅原 若水

藤原真理子

長島喜代子

町野 敦子

金栗トモ子

令和7年1月6日

麻生 明

栗原嘉一郎

里見 美季

菅原 若水

長島喜代子

町野 敦子

金栗トモ子

令和7年2月3日

麻生 明

石鎚 優

桐山 芽ぐ

栗原嘉一郎

里見 美季

菅原 若水

藤原真理子

長島喜代子

町野 敦子

横山 幸子

金栗トモ子

12月

懐手結婚指輪ひた隠す

湯婆や母の揃いの布袋

落葉道トリケラトプスの歩み

つき詰めれば本音に届くおでん鍋

逆剥けに貼るカットバン冬ざるる

回転木馬手袋ひとつ迷子なる

数え日や修正液が見つからない

ノール平和賞山茶花は咲き継ぐ

かにもかまわもにゆれるかものむれ

落葉降る吾は何落とし老いの坂

銀杏散るわ散るわハーレーダビットソン

荒星や認知という葉いかにせん

年の瀬やマイナカードの顔写真

峰ニ雪 快刀乱麻ノ一句哉

考えの足りぬ落葉が水に浮く

冬麗や下車の媪も空仰ぐ

虎落笛吹けて平和になりし国

極楽の音は聴きたやもがり笛

1月

阪神忌オカンと二人震えた日

蜂起せよ白菜鉢巻引き締めて

狒犬の声出しそうな寒さかな

丘の辺のシマウマ模様冬木立

一般論の漢は嫌ひ雪女

抱擁のたび 凍て蝶の ふるふるふる

雑踏に寒紅ぬぐひ過去を斬る

ふたりだけちかくのほこらはつもうで

量子論理解不能や寒に入る

ケセラセラ脱輪するやおでん酒

人界に混乱あれども初御空

誰でもない私でいたい初鏡

容疑者のキラキラネーム冬の夜

また来るよ母に約束寒夕焼

近藤由美子

三橋 伸子

尾崎 竹詩

北村 文江

立石 采佳

芳賀 陽子

篠崎 妙子

加藤かほる

羽田 勝二

杉本 秦空

田畑ヒロ子

佐々木重満

加藤 三眠

與起

長谷川昭放

飯田美枝子

岡本 保

竹村 半掃

近藤由美子

尾崎 竹詩

田畑ヒロ子

加藤 三眠

岡本 保

與起

菅沼とき子

羽田 勝二

澁谷 徹

北村 文江

佐々木重満

篠崎 妙子

飯田美枝子

三橋 伸子

後ろから押すのはたれや去年今年

蟒蛇も暫し畏む屠蘇の膳

初日浴び皮膚呼吸する巳年かな

◎連絡先：長谷川昭放 080・5013・6618

Kumononine100ku@mk.scn-net.ne.jp

川崎句会

12月

12月21日(土)

浴槽に輪切りの柚子を匂はせて

晩年や冬の運河の水澄みて

冬ざるるカネカネカネの闇バイト

好きな字を感謝と書いて冬温し

雪しまきみんなの知恵の猿だんご

速乾の赤いネイルヤクリスマス

年の暮五感それぞれ苦戦せり

床暖房リハビリ輪投げ繰り返す

吾子逝くや今はいずこか寒鼻

鼻歌の客用寝具年の暮れ

七転八起の年輪実万両

一瞬の老のとまどい竜の玉

日は西に隻腕で呑む年の酒

佗助の一輪こそその光かな

着ぶくれて善人顔の小市民

ポロ市にキューピーの居りセルロイド

聖樹の灯ドミノ倒しの灯が消せぬ

1月

1月18日(土)

羽生えてきそうな目覚め初明かり

暗やみにドクターイエロー初明り

枯草を踏めばぬくもりじんわりと

初御空ぽんと飛び出す好奇心

雑煮椀諸手で受くや輪島塗

蜜柑むくなぜか好機を逃がす癖

両手挙ぐ肺の奥まで淑気かな

須田 聡子

長谷川昭放

竹村 半掃

山田ひかる 報

於・川崎市総合自治会館

青島 哲夫

麻生 明

均

安藤

川島由美子

近藤由美子

斎藤佳代子

佐藤 廣枝

佐伯 悦子

白井千代子

菅原 若水

関戸 信治

ダイゴ鉄哉

花澤ちいこ

三沢 容一

吉居 珪子

山田ひかる

麻生 明

安藤 均

甲斐 泰子

加賀田せん翠

近藤由美子

斎藤佳代子

佐藤 廣枝

三が日 駅伝観戦好好爺

凧揚や小さき手から蒼天へ

倫理とは空しきものよ氷割る

「お掴まり下さい」新年に曲ります

曾孫来て好好爺の形作る

雪焼の巫女に手渡す御朱印帳

鶴は千年人は百年お元日

階の下で拍手初詣

その話皮手袋は知っている

春障子影に戦の見え隠れ

眠れない寝釈迦がひとつ春の月

特朗普は天狗となりぬ花八手

紅梅やひねもす過去の中にをり

幼名で呼ばれ再会梅の下

立春の眠りたりない顔洗う

眠剤一錠ふかぶかと寝る寒夜

わが道は脱線だらけ春嵐

大根のおまけの青き檸檬かな

駅ごとの発車音楽探梅行

富士通の工場あとや春の土

手に入れしカワサキ忍者風光る

しんしんと雪深深と子の眠り

過る春昼食メニュー再見す

春光や案内小さき「眠り猫」

雪解風盲導犬に路ゆずる

英数国脱皮を重ね春が来る

◎連絡先：事務局佐藤久まで

11月

芙蓉の実やさしい風になるところ

この先は熟柿ばかりの限界集落

十月の光をたたみ冬の蝶

佐伯 悦子

白井千代子

菅原 若水

関戸 信治

ダイゴ鉄哉

花澤ちいこ

三沢 容一

吉居 珪子

山田ひかる

2月15日(土)

青島 哲夫

麻生 明

安藤 均

植田いく子

甲斐 泰子

加賀田せん翠

川島由美子

斎藤佳代子

佐藤 鈴代

佐藤 廣枝

佐伯 悦子

菅原 若水

関戸 信治

ダイゴ鉄哉

花澤ちいこ

三沢 容一

山田ひかる

宮永 武彦 報

平田 薫

石川 夏山

江原 文

亀は背に小春日を乗せ子亀乗せ

花芒あるやうでない自己主張

日向ぼこ何の話をしてたつけ

冬うらら銀器に透ける青き瑕

山茶花や秘事の二、三抱えいるに

身に入むや悠々自適てふ余生

生存へて散るを忘れて冬紅葉

鼓屋けはいひとつや咳払い

コーヒー冷めて十一月が来てしまう

鍋料理いつも人参沈みがち

散りもみち肩寄せ合ふて夢みるや

神の留守家事蕭々と夫も留守

菊つぼむ詩吟の声の聞えきて

つやつやと大粒の栗届きたり

生き様の地味な選択衣被

青白き綿虫は死者のたましひ

冬うらら画廊の主人と立ち話

たまごサンドのたまごたつぷり冬に入る

12月

とりあへず穴は塞ぎて年の暮

通勤の電車見送り日向ぼこ

ゆりの木を見上げる冬の高さかな

無口なる侘助たちの連帯感

木の葉雨しばし大樹の声を聴く

老いも良しおでんの中の結び昆布

水鳥は首たたみおり五時の鐘

冬日和雲一片をつい探す

冬紅葉一葉一葉に宿る意志

大晦日とり敢えず塗るオロナイン

人生論一行ごとに葛湯ふく

聖夜には錨をあげよ摩天楼

桐山 芽ぐ

吉村 元明

渡辺 順子

町野 敦子

佐々木重満

瀬古 修治

多久島重宏

蓮田 宿仮

麻生 明

柳 蒼柳

須藤 節子

石鎚 優

遠藤 美緒

金栗トモ子

菅原 若水

光田久美子

宮永 武彦

菅原 若水

蓮田 宿仮

平田 薫

多久島重宏

佐々木重満

渡辺 順子

桐山 芽ぐ

六川

瀬古 修治

町野 敦子

金栗トモ子

江原 文

石鎚 優

柳 蒼柳

皇帝ダリア空へ展がる円舞曲

葉の棘は花終の守り神

冬めける野猿の群れの露天風呂

遠景の冬景色見て酔い醒ます

ヒジャブ脱ぐ自撮りの二人大紅葉

風に舞ひ水に遊べる木の葉かな

1月

冬空を彫り出す櫻の一樹なり

懸かり凧つひと立ち寄る縄のれん

分身は宇宙へ現身は冬眠中

山茶花の散って真の愛を知る

卵ひとつ足して今宵はおでん酒

水仙の黙して正す吾が背筋

ゆずりはの一枝を挿せる訣れかな

相聞も天にのぼるかどんどの夜

アロエの花天藍の空向きて咲く

埋火の仄かな光りガザ哭くや

あまた夢乱舞してゐる枯野かな

食べられぬ料理番組冬ごもり

石路とわたしの思いちがひかな

冬籠今日も余命の無為に過ぐ

人界はカオス初御空の真青

白鳥と目が合っている負の予感

旅人と見るや蜜柑を挽いでくれし

心地よく走れば冴ゆる心かな

ワープする波紋の中に泳ぐ鴨

着膨れて駅のベンチに見える海

◎投句、選句、選評すべてインターネット上で行っ

ています。毎月第三月曜日投句会切

◎どなたでも。参加者募集中。登録・参加は無料。

(初回参加はアカウント作成が必要ですので、お

吉村 元明

須藤 節子

光田久美子

石川 夏山

麻生 明

宮永 武彦

江原 文

吉村 元明

金栗トモ子

町野 敦子

光田久美子

多久島重宏

石鎚 優

柳 蒼柳

須藤 節子

六川

菅原 若水

渡辺 順子

平田 薫

瀬古 修治

佐々木重満

麻生 明

桐山 芽ぐ

遠藤 美緒

蓮田 宿仮

宮永 武彦

宮永 武彦

takehikom0410@gmail.com

takehikom0410@gmail.com

takehikom0410@gmail.com

takehikom0410@gmail.com

磯子凧句会

尾澤 慧璃 報

於 横浜市社会教育コーナー

1月

山鳩の屋根にをりたる寒日和  
豆撒の傘寿の赤きネイルかな

佐藤 久

足裏に触るる暈や冬館

藤田 ゆい

初春や空の高さに肩車

村上 裕也

春近し傘で素振りの係長

池田恵美子

ラグーラの背番号より湯気立ちぬ

尾澤 慧璃

立読みの新刊本や日脚伸ぶ

辻内美枝子

目出度さも餅二つほど初みくじ

川野ちくさ

雪富士の遥かにみなどみらいかな

六川

傘寿なほ学び忘れず寒椿

鹿又 英一

元日に来年を言ふ老母かな

長濱 藤樹

◎会場 横浜市社会教育コーナー研修室C

瀬崎 良介

◎日時 奇数月の第4水曜日 13時〜

(JR磯子駅より徒歩4分)

◎連絡先 尾澤慧璃 kinglovestea@gmail.com

金八句会

12月

ぬぐいたてのような空あり石露の花

杉 美春 報

1月

初買のひと駅スニーカーで行く  
宿酔の夢に傷あり白鳥

里見 美季

夕飯はカレーライスの五日かな

栗林 浩

山茶花散る話し出したら止まらぬ子

松浦 泰子

ゆずり葉の枝一つ活け子らを待つ

中村 光男

初雪や食べてすぐ出る拉麺屋

石鎚 優

子供らの侍気取り寒稽古

尾澤 慧璃

ジャケットの虫食いほどの恋心

佐藤 久

足裏の触れる暈や冬座敷

なつはづき

裸木の毅然とならぶニュータウン

村上 裕也

茂林寺に居並ぶ狸日脚伸ぶ

神谷 純子

夕されば目の光り出す雪兎

扇 義人

◎毎月第一金曜日 夜8時より。ZOOM使用。

◎連絡先 杉美春 niharusugi@jcom.home.ne.jp

第一水曜日 出句締切、事前投句

湘南サンシャイン句会

1月

堀口みゆき 報

於・藤沢市役所本庁舎5階会議室

ポインセチア一人の夜も華やげる

青柳 白芳

つまずくも立つる速さよ寒雀

安藤 靖

昭和百年戦さの記憶建国日

金栗トモ子

空中楼阁 ピカソノ女 歪ナリ

塵

風邪ごえの母にいつぼんりポピタン

芳賀 陽子

生きようよ暦の上は春ですよ

日置 正次

寒明けの池を歪めて鯉の背ナ

保里よし枝

かたまりて眠る水鳥日の豊か

馬来まち子

葉ぼたんのだんだん解けゆく誤解

山口 愛子

大根の葉のばさばさと斬られけり

山下 遊児

寒椿を打てば故郷近くなる

渡辺 正剛

窓越しに歪みし桜大樹の芽

堀口みゆき

◎連絡先 堀口みゆき ni.yuhori@guchi@yahoo.co.jp

電話 090 3914 0568

湘南サンシャイン句会主催吟行報告

山下遊児 記

日時 令和6年12月6日(金)

吟行地 大船駅周辺

句会場 鎌倉芸術館

(フラワーセンター・大船観音)

講演 高柳克弘 「鷹」編集長

演題 先人に学ぶ俳句の言葉の磨き方

当日は朝からの晴天で絶好の吟行日和。尾崎名誉会長の明るい挨拶により吟行句会は幕を開けた。

講演は「俳句は表現力、言葉を磨く事が大切」と言う高柳克弘氏の言葉でスタートした。内容は添削や推敲について古今の俳人の例を挙げてクイズ形式で説明して頂き、解り易く今後の句作りに役に立つ講演であった。また「鷹」創刊者の藤田湘子は擬人化や比喻を好まなかったという裏話まで飛び出して有意義であった。

選句が終わり佐藤久さん・青木敏行さんの披講に続き尾崎名誉会長・内藤ちよみさん・なつはづきさん及び高柳克弘氏にも講評を頂く。特に高柳氏の講評は丁寧で、選句された以外の句についても講評をして頂き有り難かった。いよいよ成績が

発表され表彰式へと移り句会は成功裡に終えた。投句者の数も五十三名の大台に乗せる事が出来た。句会の後は高柳氏も含めての懇親会を実施して大いに盛り上がった。



句会場

(写真：宮永武彦)



高柳克弘氏

入賞者 十五位まで  
 裸木や何でも聞こえそな空  
 小春日の空を割りたるモノレール  
 観音の見下ろす駅の師走かな  
 いちやう散るしづかに息を継ぐ大地  
 冬薔薇の紅重ければ重く散る  
 一篇の詩を封じ込む耳袋

なつはづき  
 藤田 裕哉  
 青木 敏行  
 関根 洋子  
 山下 桐子  
 杉 美春

帰り花小津のキネマの色褪せず  
 ものふの気骨ずしりと朴落葉  
 声あげて子は駆け寄りぬ大かぼちや  
 観音の胸の空洞冬灯し  
 観音は二重まぶたぞ冬うらら  
 いま母に呼ばれたような石露明かり  
 綿虫や時間どほりに閉まる門  
 冬桜余生静かに生きんとす  
 観音の白肌残し山眠る

小堀公美子  
 内藤ちよみ  
 荻野 樹美  
 尾崎 竹詩  
 山下 遊児  
 山口 愛子  
 河村 笑  
 金栗トモ子  
 青柳 白芳

春の一句



(写真：里見美季)

路線バス時刻気まぐれ花咲けり  
 花疲れ猫はお髭でもと思ふ  
 客席の隣へ花魁花ふぶき  
 凍ゆるむ町に聞こゆるバラライカ  
 梅が香や十歩で渡る長寿橋  
 夫婦道祖神春一番を諭す  
 明け空に星の残像花辛夷  
 クラクシヨンながなが佐保姫のあくび  
 きみに告げる柳暗花明さくら咲く

青島 哲夫  
 猪狩 鳳保  
 町野 敦子  
 横川はつこう  
 内田ゆり子  
 石鎚 優  
 加藤 三眠  
 たむら 葉  
 宮永 武彦  
 宮永 武彦

祝 第34回あらかわ俳壇 特選

一枚の水の流れの金魚かな

宮永 武彦

II 地区動向・消息 II

1. 1月13日(月) 会計監査
2. 1月15日(水) 役員会・拡大幹事会  
 令和6年度事業報告・収支報告、令和7年度  
 事業計画・予算案、組織・役員改正案、令和

3. 新会員紹介  
 7年度俳句大会実行委員長選出、等  
 《正会員》  
 山澤 和子(横浜市) 加藤 西葱(茅ヶ崎市)  
 濱田 聡子(横浜市) 宮川 柚子(横浜市)  
 竹本 典子(横浜市) 星 一義(南足柄市)

《会友》

- 辻内美枝子(横浜市) 木下 研作(横浜市)  
 蜂谷 和子(横浜市) 富田 博明(川崎市)  
 伊藤 春子(川崎市) 大森 幸子(川崎市)  
 乾 典子(川崎市) 甲斐 泰子(川崎市)  
 登 秀子(横浜市) 宮本 英司(川崎市)  
 平石小代子(横浜市) 阿部キヨ子(川崎市)  
 藤原てい子(横浜市)

4. 会員動静

5. 逝去謹悼  
 神谷たくみ(川崎市) 茨城から転入  
 大上 恒子(横浜市) 令和七年一月

《編集後記》

○俳句大会講演録と湘南サンシャイン句会吟行記  
 を特集しました。お楽しみください。  
 ○会報168号では夏の一旬を募集します。  
 編集人までご投句ください。5月20日締切です。

発行所 神奈川県現代俳句協会  
 発行人 芳賀 陽子  
 編集人 杉 美春  
 〒252・0325



相模原市南区新磯野4-4-1-506  
 電話 090・6534・1452  
 Eメール miharusugi@jcom.home.ne.jp

印刷所 (有)湘南グッド  
 Eメール hisashi36@fj9.so-net.ne.jp  
 電話 090・6587・0113